

三輪山と二上山を結ぶ箸墓伝説

二上山博物館館長

石野博信

一九八一年(昭和五六)、橿原考古学研究所が調査中の広陵町黒石十号墓を訪ねた。弥生後期末、約一八〇〇年前の方形墓が近鉄築山駅北西の丘の上に築かれていた。中央部に二つの木棺跡が並んでいた。一基ずつ写真をとろうとカメラを構えたら、木棺の延長線上のレンズの向こうに二上山の雄岳と雌岳の谷間がすっぽりとおさまっていた。不思議に思つて隣の木棺で同様に構えてみたらずかにはずれる。二つの木棺は共に東西方向で約二メートル離れて並んでいる。わずかに二メートル離れて平行して並んでいるのに、南棺の被葬者は、二上山を十分に意識していたのではないかと考えた。

大和の人々は、いつの頃からか二上山は「日の沈む山」と意識してきた。飛鳥京や藤原宮付近からの二上山の入り日は、今も撮影ポイントとして著名である。当然、飛鳥時代の人々も二上山の入り日を眺め、「うつそみの……」という大来皇女のうたを共感できたのであろう。

その意識が弥生時代にまでさかのぼると考えるのはかなり冒険だ。黒石十号墓南棺例が二上山を意識していたとしても、その後、類例はみつからない。しかし、弥生後期二世紀は、いわゆる「倭国乱」の時期である。昨年、鳥取県青谷上寺地遺跡で弥生後期の殺傷遺体が九十体以上もみつかり、世間を驚かせた。「倭国乱」

は日本海沿岸に拡がっていた。

大和でも激しい戦いがあつた。二世紀の山城は、奈良・桜井・橿原・御所などにある。橿原市千塚遺跡では「のろし場」もみつかっている。人の死への想いは、太陽の落日に結びつく可能性は強い。寺沢薫さん(橿原考古学研究所)が指摘している兵庫県姫路市長越遺跡の弥生後期の土器に描かれた日の出、日の入図は、弥生人の太陽運行への想いを示している。大和の弥生人も同じ想いがあつた、と考えてもよさそう。

大和弥生人のそのような想いが、脈々と続き、鎌倉時代の香芝人である恵心僧都源信の『往生要集』浄土信仰へと連なっているのだろうか。

三輪山は、「日の出の山」という。小川光三さんに教えて頂いて、一九八〇年(昭和五五)の秋分の日、橿原市多神社から三輪山頂の日の出を拝んだ。多神社周辺は、大和の弥生拠点集落の一つである多遺跡である。三輪山が神奈備型神山としてよく見える範囲は、北西は天理市庵治付近、西方は橿原市中曾司付近、南西は桜井市池の内付近である。およそ奈良盆地東南部で、この間にはとりわけ弥生から古墳時代にかけての遺跡が多い。

とくに三輪山麓には、三・四世紀の都市である纏向遺跡をはじめ、初期ヤマト政権の大王墓を含むおおよまと古墳集

団が拡がる。萩原儀征さん(桜井市教育委員会)は、纏向石塚古墳の突出部が三輪山頂を向いていることに気がついた。同古墳は三世紀初頭の全長九六メートルの古墳であり、その時、三輪山信仰は始まっていたのだろうか。ところが同じ地域にある纏向勝山、纏向矢塚、東田大塚などの三世紀代の長突円墳(前方後円墳)の突出部の方向はバラバラだ。纏向古墳群の一族のトップクラスの人々の中でも特定の個人が三輪山を強く意識していたようだ。

二・三世紀に、磯城と葛城の地の特定個人の間に三輪山と二上山に対する信仰が始まっていたらしい。

三輪山麓の縄文集落・三輪遺跡や弥生集落の芝遺跡には二上山産のサヌカイトが石器の素材として多く持ち込まれている。二上山サヌカイトの流通範囲は近畿各地はもとより、それ以上に広まっているので、特に三輪山麓との関係強調することはできない。しかし、「日本書紀」崇神天皇条に登場する「箸墓伝説」は特異である。

箸墓、「是の墓は、日は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る。即ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて、手通伝にして運ぶ。」

「箸墓」は、桜井市箸中の箸中山古墳(全長二八〇メートル)の長突円墳に当てられており、墳丘内に大阪府柏原市芝山

の石が散在していることが確認されている。『日本書紀』の大坂山は二上山のことであり、芝山は二上山塊に含まれる。伝説は現実味を帯びてくる。

箸中山古墳は、初期ヤマト政権の最初の大王墓と言われている。最初の大王の巨大墓を造るとき、なぜ、大坂山(二上山)の石を運んだのだろうか。三輪山麓を本拠地とした大王家にとっても、二上山は「日の入る山」として意識していたからこそ二上山の石を運んだのではないかと。昼は三輪山麓の人々が作り、夜は二上山の神が作ったのが箸墓だった。

今、三輪山麓の狭井神社で、毎年八月二八日に二上山の落日の祭りが行われているという。日の出の山の麓の人々が、日の入りの山の落日をまつる。

崇神天皇は、御間城入彦、御真木入日子、美麻紀伊理毗古、ミマキイリビコとよばれ、次の垂仁天皇は活目入彦、伊玖米入日子、伊久米伊理毗古、イクメイリビコとよばれていた。上田正昭氏はこの点に注目して崇神・垂仁の王権をイリ王朝と名づけておられる。沖縄では西をイリと言う。イリ王朝は、西方を強く意識した王権であり、二上山はイリ王朝のシンボルであった。